

借 景（しゃっけい）

先日、三宅島での勤務を通してご縁をいただき、大変お世話になった元三宅高校、元三宅中学校の校長先生方が、私の実家に遊びに来てくださいました。

私の実家は、山あいの静かな場所にあります。

翌朝、皆さんと朝食を囲んでいた時のことです。窓の向こうには、緑豊かな山々が幾重にも重なっています。その景色を眺めていた元三宅中学校の校長先生が、とても感動してくださり、「これを『借景』というのですね。」とおっしゃいました。



「借景（しゃっけい）」とは、日本庭園などで、庭の外にある山や森などを取り込み、庭の一部として味わう考え方です。「景色を借りる」と書いて、借景。

私にとっては、幼い頃から何度となく目にしてきた、いつもの山の景色です。しかし、その一言を聞いて改めて窓の外を眺めると、少し違って見えました。

見慣れた景色も、誰かの目を通すと、違って見える。

私にとっての「いつもの景色」を、その先生の一言が、もう一度見せてくれたような気がしました。

連休明けのある日。校長室の前にも、すてきな秋の景色がありました。



青い模造紙を夜空に見立て、そこに浮かぶ黄色い月。ススキや秋の草花、そして月見団子。指導補助の先生が、中秋の名月に合わせて作ってくださった飾りです。何うと、毎年この時季に飾ってくださっているとのことでした。

子供たちは廊下を通りながら、何気なくこの景色を目にします。「お月様だ」「お団子がある」。そんな小さな気付きから季節を感じ、「今夜、月を見てみようかな」と思う子もいるかもしれません。

子供は、授業の中だけで育つものではありません。

廊下の掲示、校庭の草花、先生から掛けられる一言、友達の頑張る姿、地域の方との出会い。子供を取り巻く環境の一つ一つが、知らず知らずのうちにその心を耕していきます。

そう考えると、教育にも「借景」があるように思えてきます。子供の周りにある人、もの、自然、文化を生かしながら、子供自身が感じ、気付き、問いをもつ。中秋の名月の飾りも、そんな散田小学校の小さな「借景」の一つなのでしょう。

そして、もう一つ。

ある日、打合せのために校長室の廊下側の戸を閉めていると、戸の上側の窓ガラスに、小さな顔が「ぴよこっ」と現れました。

一年生です。

校長室の中をのぞこうと、一生懸命に背伸びをしています。顔が見えたかと思うと隠れ、しばらくすると、また「ぴよこっ」。その姿が何とも愛らしく、思わず頬が緩みました。

ふだん、校長室の戸は、「いつでも、誰でもどうぞ」という気持ちで開けています。その日は、戸を閉めていたからこそ出会えた、小さな景色でした。

実家の山々、中秋の名月、そして窓ガラスからぴよこっと現れる子供の顔。

大切なものは、遠くに探しに行かなくても、いつも見ている景色の中にあるのかもしれない。

今日も校長室の戸は、できるだけ開けておこうと思います。そこから見える一人一人の子供たちの姿を、見過ごさないために。

そして、「借景」というすてきな言葉を教えてくださったのも、三宅島でいただいたご縁でした。

「借景」を教えてくださった、しゃれっ気 たっぷりの先輩方とのご縁にも、感謝しながら。